

2-2. 佐鳴湖のめぐみに育まれる歴史的風致

(1) はじめに

佐鳴湖は 2 級河川都田川水系の新川中流部に位置し、淡水と海水が混じり合う汽水湖であり、面積約 1.2 平方キロメートル、平均水深約 2 メートル(最大水深約 2.5 メートル)、全長(南北方向)約 2 キロメートル、幅(東西方向)約 0.6 キロメートル、水量約 240 万立方メートルの天然湖沼である。佐鳴湖南部から流出する新川は、いくつかの河川と合流したのちに、同じく汽水湖である浜名湖へと注ぎ、浜名湖との標高差が 10 センチメートルから 20 センチメートルであるため、潮^{ちよう}汐^{せき}の影響で海水が流出入を繰り返している。その周辺は浜松市の中心街から西へ約 5 キロメートルという立地条件から、耕地整理や大規模な団地造成などにより都市化が進んでいる。



図2-2-1 佐鳴湖

佐鳴湖畔には周遊できる散策路が整備されており、北岸には管理棟及び芝生広場、西岸には遊戯広場や里山保全地区、東岸には野鳥観察舎等が整備されている。また、夏には花火大会が開催されるなど市民の憩いの場となっている。さらに、漕艇場や艇庫も整備され学生ボート部の練習場としても利用されており、うなぎ等の淡水における漁業である内水面漁業も営まれている。



図2-2-2 佐鳴湖に飛来する水辺の宝石「カワセミ」

(2) 佐鳴湖の成り立ちと周辺の歴史

今からおよそ 6000 年前、佐鳴湖は浜名湖と並んで入り江として原型が形成され、天竜川や都田川が大量の土砂を運んだことでおよそ 2000 年前に南部の沿岸に砂洲が形成されて湖沼となった。

佐鳴湖周辺に人が住むようになったのはおよそ 4000 年前の縄文時代のことで、蜆塚遺跡の発掘調査によってそれをうかがい知ることができる。蜆塚遺跡の貝塚はそのほとんどがヤマトシジミで占められ、すぐ近くまで水辺が迫っていたこ

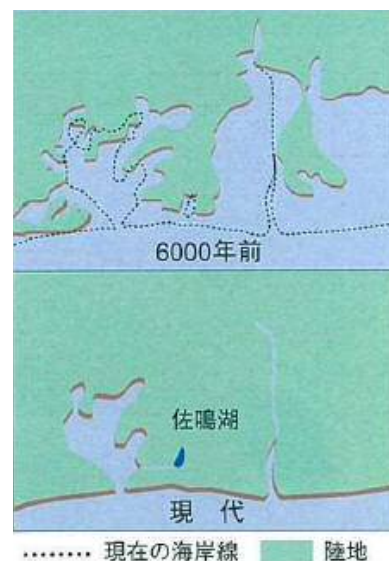


図2-2-3 佐鳴湖ができるまで

とが分かっている。

佐鳴湖は太古からの地形の変動を経て、弥生時代以降には現在の姿を現した。室町時代の数度にわたる大地震により浜名湖と遠州灘にある砂州(今切口)が決壊したことにより、淡水であった浜名湖に海水が流れ込み始め、満潮には新川に沿って佐鳴湖まで海水が遡上し、海水が混じる湖沼となった。

先人たちは風光明媚な佐鳴湖を愛で、寿永2年(1183)ころの蒲冠者源範頼は北岸に別邸を設け、茶の湯などの清遊をしたことから、「御茶屋」という名がついた。当地には「史蹟源範頼別邸御茶屋跡」があり、佐鳴湖にそそぐ新川に架かる橋を「御茶屋橋」と呼んでいる。

戦国時代から江戸時代にかけて、大量の荷物を陸路で運ぶことは大変なことで、浜名湖と佐鳴湖をつなぐ新川を利用した舟運しゅううんが盛んとなった。浜松城の石垣の石材はこの舟運を利用して、浜名湖北岸の岩石を佐鳴湖東岸で陸揚げしたとみられている。また、江戸時代の国学者杉浦国頭すぎうらくにあきらの遺稿集『曳駒拾遺』によると天正7年(1579)徳川家康は正室・築山御前つきやまごぜんと長男・信康が敵方と内通したとの疑いで織田信長から二人の処罰を求められていた。家康はやむなく正室を浜松に呼び寄せることになり、岡崎城をあとにした築山御前は姫街道から三ヶ日に出て浜名湖を渡り、新川の舟運により佐鳴湖に入り、北東の湖岸の小藪に上陸した。そのほとりで待ち受けていたのは家康の家臣で、そこで築山御前は斬られて命を奪われたという伝説が残されている。

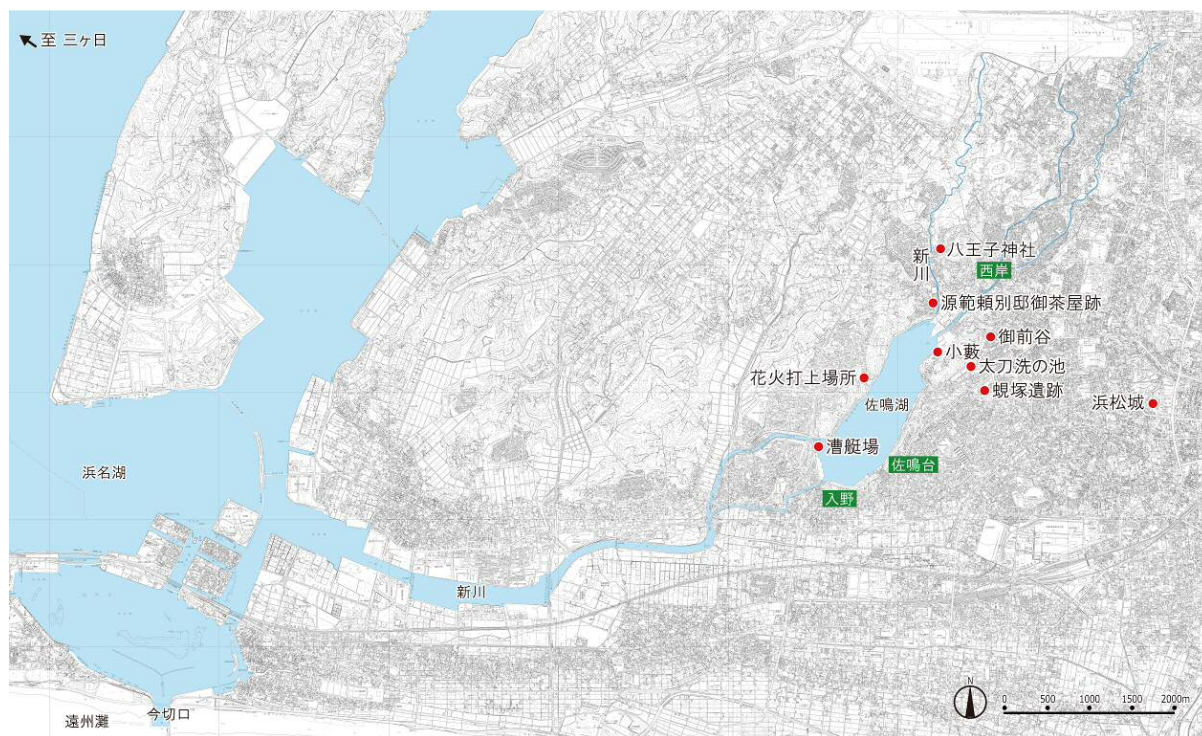



図2-2-4 新川の水 flow と浜松湖と佐鳴湖のつながり

江戸時代の末になると、入野の文学者竹村広蔭^{たけむらひろかげ}は佐鳴湖にこよなく親しみを持ち、瀟湘八景^{しょうしやう}・近江八景^{きんけい}に倣って佐鳴湖の景色のよい所を8か所選び「佐鳴八景」として歌を詠んだ。



④大山の夜雨
 大山は佐鳴湖西北ひょうたん池の辺りをさす。
 春は花見の場、夏は佐鳴湖花火大会の打ち上げ場となる。
夜の雨の 晴れゆくまに 吹く風の 音にぞひびく 大山の松
 意味：夜の雨が止んで晴れてきて、風が吹き出した。
 耳を澄ますと、大山の松からさわやかな風の音が響いてくる。

⑤太田の落雁
 太田は大山の北に続く波静かな湖岸で、付近は人家はない。
かき連ね 落ちる雁の たまずさの 数も太田の 霧のあけぼの
 意味：長く連なって降りてくる雁、それは季節の便りだ。
 太田の夜明けの霧の中にたくさんの数の雁が見え始めた。

⑥大良の暮雪
 大良の山は小藪から医療センター付近までの竹の多い丘で、昔はこの辺りまで湖が来ていたという。
払ひあへず 重げに見へて 見る人は 大良の山の雪の 夕暮れ
 意味：雪が降り積もり垂れ下がった竹が重そうに見えるが、払い落とすことができない。
 でも、雪の大良の山が夕日に映えるのを見ている人には美しく感じるだろう。

③少林山の秋月
 臨江寺は観月の名所。
 昔は寺の前まで湖だったが、今は住宅ができて佐鳴湖は見えない。
影高く うき世はなれて 照らすかな 少林山の 秋の夜の月
 意味：善いことや悪いことなどいろいろなことがあるこの世を、澄んだ月が空高くから照らしている。
 少林山臨江寺から見る秋の夜の月は本当に美しい。

①大屋橋の夕照
 大屋橋は、現在の雄踏街道の佐鳴橋のことで、入野大橋、土橋、幾野橋、竹溪橋とも呼ばれた。
ひむがしの 浜松の市 過ぎ来たる 夕日にわたる をちこちのひと
 意味：東の浜松の街を通り過ぎて、佐鳴湖畔に着いた。人々が夕日に照らされ、橋を渡ったり歩いているのがあちらこちらに見える。

⑦三ツ山の晴嵐
 三ツ山は小藪のすぐ南の小さな三つの丘をさす。昔は好景で浜松城主も訪れた。晴嵐は晴れた日の強風を意味する。
山姫の 晒せる布と 三ツ山の あらしに寄する 磯の白波
 意味：山を守る女神が晒した白い布を広げたように、強い西風で三ツ山の磯に白波が立っている。

②北浦の帰帆
 北浦は、佐鳴湖最南の佐鳴湖橋(富士見橋)から大屋橋付近までの川沿いをさす。
真帆ひきて 舟を並べて きほふなる 北浦風の 吹くにまかせて
 意味：帆をいっぱいに出して風を受けて帰る舟が、並んで競争し合っているように見えるが、それは北浦を吹く風に任せて動いているのだ。

⑧西湖山の晩鐘
 西湖山の西湖は、中国浙江省の風光明媚な湖の名で、それを使ったもの。
湖の 山もほのかに 見えねども かすみわけ来る 入あいの鐘
 意味：夕霧がかかり佐鳴湖周辺の山もはつきり見えなくなったけれど、霧の中から聞こえる龍雲寺の夕暮れの鐘の音が心に沁み渡る。

図2-2-5 佐鳴湖の名所(佐鳴八景)

¹ 中国湖南省の洞庭湖に流入する瀟水と湘江が合流する辺りを瀟湘といい、古より風光明媚な水郷地帯として知られる。その自然景を季節、時間、晴雨などの条件によって8つの主題に分けて山水画として描いたもの。
 なお、8つの主題とは、夕照、帰帆、秋月、夜雨、落雁、暮雪、晴嵐、晩鐘。
² 滋賀県琵琶湖岸の美しさを代表する8つの景勝地。中国の瀟湘八景にちなんだもの。

明治から昭和にかけて、流域の小川には豊かな水量を利用した水車小屋があり、製粉、精米、製油などが営まれた。沿岸の人々の漁業も盛んで、湖面に映る美しい四季の景色を舟遊びで楽しんだ。昭和10年(1935)から昭和30年(1955)ごろは飛び込み台が作られ、水泳の授業や遠泳なども行われていた。小藪の湖畔には多くの貸船屋や飲食店が軒を並べ、岸边には多くの釣り人が釣糸を垂らしていた。



図2-2-6 佐鳴湖小藪の湖岸風景(昭和初め(1926)ごろ)

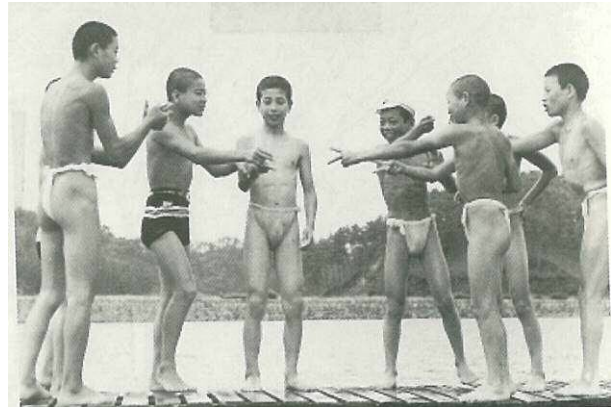


図2-2-7 佐鳴湖で遊ぶ子供たち(昭和30年代)

戦後の高度経済成長に伴い、佐鳴湖の水環境は深刻な状況を迎えることとなった。下流河川の新川は潮汐により絶えず順流及び逆流を繰り返すため、河川水が浜名湖へ流出しにくく、滞留しやすい特徴がある。さらには都市化の進展に伴い人口が増え、森林や畑地が減少し、雨水が地中に浸透しないで流出する不浸透域の拡大や湖への汚染物質の集中など、人為的な影響から日本で有数の汚濁状態となってしまった。そこで、佐鳴湖を取り囲む地域では、「美しい景観や季節の変化を感じ、多様な生物や環境に触れることのできる佐鳴湖をみんなで作ること」を目標とし、行政においては佐鳴湖内や下流河川にたまっている汚泥の^{しゅんせつ}浚渫や浄化施設の建設、湖岸植生の造設等に携わり、地域住民や事業者においては水質浄化意識の向上として奉仕活動や環境教育を行い、官民一体となって湖沼の浄化活動に取り組んでいる。近年は、行政や企業の取り組みに加え、ゴミ拾いやヨシ刈り等などの市民の努力の成果により、佐鳴湖の水質が改善してきている。今も昔も佐鳴湖の景色は名勝として風光明媚なことには変わりなく、人々の憩いの場であり、周辺地域では浜松まつりの凧や法被に佐鳴湖ゆかりの意匠を取り入れるなど地域の象徴となっている。このようにして、毎日たくさんの人たちが佐鳴湖と深い関わりをもって生活をしている。



佐鳴台地区には、浜松城主徳川家康の正室築山御前にまつわる太刀洗の池および赤宮神が存在していたなど、双方女性にまつわる史跡から、女性の喜怒哀楽を表現するという般若の面を使用している。

図2-2-8 佐鳴湖ゆかりの意匠を取り入れた浜松まつりの法被等

(3)佐鳴湖周辺を構成する建造物

①蜆塚遺跡(蜆塚公園)

ア.蜆塚遺跡

蜆塚遺跡は、今からおよそ 4000 年前、三方原^{みかたはら}台地の南縁に営まれていた縄文時代後期から晩期前葉の遺跡で、東海地方を代表する大きな貝塚を伴う集落跡である。この貝塚の存在は、江戸時代の国学者杉浦国頭^{すぎうらくにあきら}の遺稿集『曳駒拾遺』にも記され、古くから知られていた。また、天保 10 年(1839)、入野村の竹村広蔭が、著書『変化抄^{へんかしょう}』に、「蜆塚の貝殻を畑の肥料として掘り出すことが盛んになり、貝の山が失われた。地名の由来なので、庄屋が運び出しをやめるようお願いした。」との内容を記しており、蜆塚遺跡の存在がこのころの人々の生活に深くかかわっていたことが見て取れる。

イ.貝層保存施設

蜆塚公園は昭和 30 年(1955)からの蜆塚遺跡の発掘調査と並行して公園整備が進められ、昭和 34 年(1959)には貝層断面保存処置が施された。貝塚の断面をそのまま樹脂で固め、常時見学できる施設となった。貝塚は貝殻のカルシウムが他の遺物の酸化溶解を防ぐため、通常の遺跡では消滅してしまう骨などが遺存しており、原始時代の人骨が得られるなどの特徴がある。蜆塚遺跡から出土した貝類の 9 割以上がヤマトシジミで、獣骨では鹿や猪の骨が、黒い石で作った鋭い矢じりで貫かれた状態で出土している。

ウ.博物館

昭和 33 年(1958)浜松市立郷土博物館が浜松城天守閣にて開館し、発掘調査資料の一部を展示していた。

蜆塚遺跡の一角には、昭和 35 年(1960)に蜆塚遺跡出土品収蔵庫(鉄筋コンクリート造平屋建、現在



図2-2-9 発掘調査とともに公園整備が進む蜆塚遺跡(昭和 33 年(1958))



図2-2-10 発掘中の第1貝塚
昭和 32 年(1957)の発掘調査で貝塚の堆積を確認したところ



図2-2-11 貝層保存施設



図2-2-12 博物館第4収蔵庫(左)と別館(右)
手前は第3貝塚

の浜松市博物館第4収蔵庫)が、昭和39年(1964)に陳列館(鉄筋コンクリート造2階建、現在の浜松市博物館別館)が建設され、市立郷土博物館蛭塚別館として資料の収蔵・公開を行っていた。その後、昭和54年(1979)に蛭塚遺跡の南側隣接地に浜松市博物館が建設され現在に至っている。

②佐鳴湖公園

佐鳴湖公園は市街地に隣接し、水と緑に囲まれて風光明媚な環境にある。昭和24年(1949)に西岸の一部を「根川山公園」として計画し、その後計画を拡大し「佐鳴湖公園」として名称を変えて昭和43年(1968)に一部を開園した。その後、佐鳴湖を囲む形で整備され、現在、開設済みの公園の面積は約50.43ヘクタールである。自然のたたくまいと人工的な整備とが相まって浜松の憩いのシンボルとなっている。

佐鳴湖畔には周遊できる散策路が整備されており、北岸には芝生広場や北岸管理棟などがあり、北岸管理棟の多目的室は佐鳴湖の自然に関する会議や集会で利用されている。西岸には遊戯広場や里山保全地区があり、佐鳴湖里山楽校が里山の復元や保全活動を行っている。また、夏には花火大会が開催される。

佐鳴湖漕艇場は公園の南西に位置する。管理棟をはじめ、3棟の市営艇庫を有し、市営第2艇庫の北側には昭和32年(1957)の第12回国体漕艇大会の記念碑が残っている。佐鳴湖漕艇場は市街地に近いため、人々の往来や触れ合いが多いことを特徴とする。一般的に漕艇競技はダムや川で行われることが多いなか、佐鳴湖漕艇場は四方が囲まれ全方位の湖岸を見渡すことができ、全国的にも珍しい環境にある。南北に1,000メートル、8コースを有し、日本ボート協会からC級コース¹として正式に認定されている。また、遊覧船などが運航しておらず、大きな波が立つこともないため、漕艇場として高い評価を得ている。

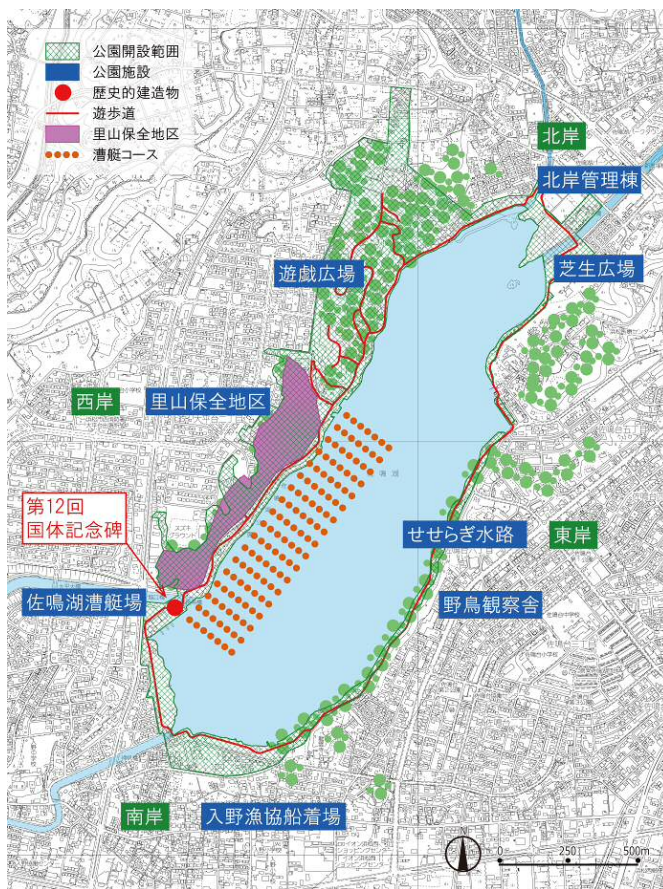


図2-2-13 佐鳴湖公園施設

¹ 等級は、レーンや長さ水深などを勘案し認定される。全日本級大会および地域予選会で利用されるコースはA・B・C級の上位3等級のみ。佐鳴湖漕艇場はC級。



図2-2-14 佐鳴湖漕艇場の管理棟と第1、第2、第3艇庫



図2-2-15 第12回国体漕艇大会記念碑

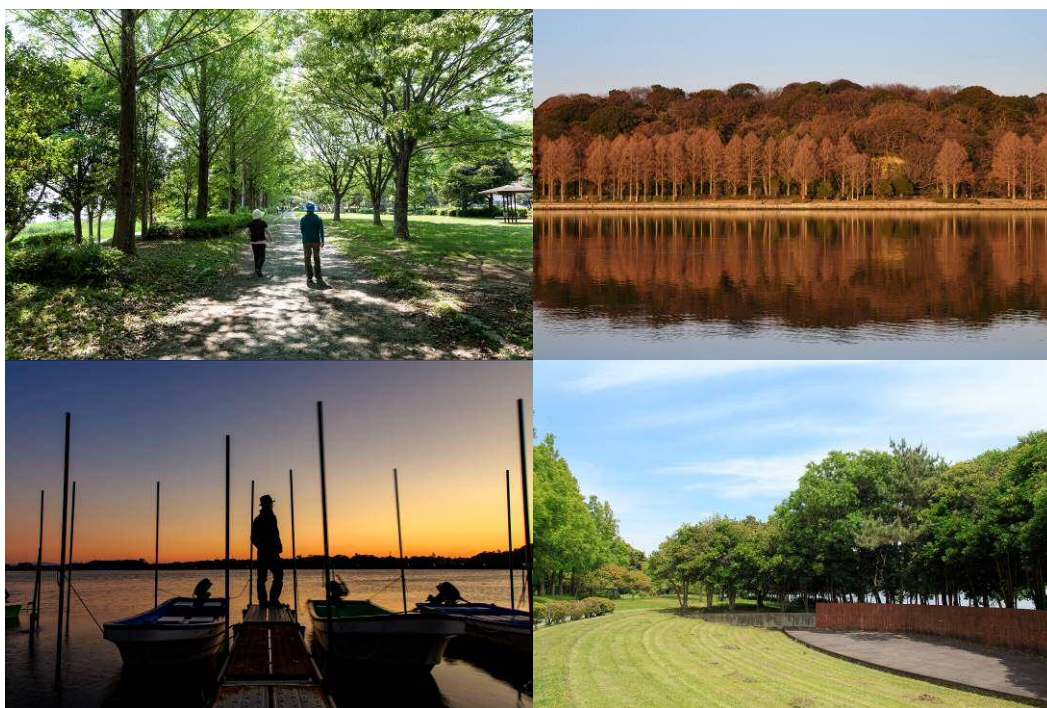


図2-2-16 佐鳴湖公園 写真 Koji Kishita 氏

③八王子神社

八王子神社の拝殿は桁行3間、梁間3間の切妻造平入り瓦葺き。本殿は桁行1間、梁間2間の切妻造平入り瓦葺き。祭神は大歳神惣光天王(年神様)、大將軍魔王天王(戦の神)、大陰神俱摩羅天王(子孫繁栄の神)、歳刑神徳達天王(経済の神)、歳破神良待天王(平和神)、歳殺神侍神相天王(悪魔払いの神)、黄幡神宅神相天王(家内安全の神)、豹尼神配主母気神天王(怪我、病気、毒を退散する神)である。社殿は佐鳴湖の上流河川の新川沿いに位置する。現在の社殿は平成元年(1989)に再建したもの。境内の手水鉢には、「紀元二千六百年」と刻銘されている。



図2-2-17 八王子天王社再建録
(明治29年(1896))

明治29年(1896)『八王子天王社再建録』によると、政府によって推進された神社統合により、富塚町(旧浜名郡富塚村)でも神社数の改変を余儀なくされ、周辺の神社と統合し「境内神社」と称した時代があった。すると村では疫病が流行し、ついには命を落とした者まであったため、村人は「八王子様の祟り」だとして統合された神社を元の位置に戻し、独立祭祀が行われるようになり、現在も続いている。

毎年7月14日の祭りの夜には花火が打ち上げられ、「八王子様の花火」として親しまれてきたが、付近が住宅地となったため、境内で花火を打ち上げることが不可能となってしまった。



図2-2-18 八王子神社



図2-2-19 八王子神社社殿

④^{すんだがや}巖島神社(寸田ヶ谷)

巖島神社の拝殿は桁行3間、梁間2間の切妻造平入り瓦葺き。本殿は桁行2間、梁間2間の切妻造平入り瓦葺き。祭神は市杵島姫之命である。持統天皇の御代の夏、大雨洪水のときに寸田ヶ谷開祖長忌寸^{ながのいみき}奥麿呂^{おくまろ}が水難鎮護のため^{やらず}不遣池と呼ばれる新川水源地に勧請鎮祀したと伝えられる。本殿拝殿建築寄付額によると、昭和10年(1935)4月再建。鳥居は明治44年(1911)11月建立。地元では水神様と親し



図2-2-20 巖島神社

まれ、祭礼は毎年4月の第2日曜日に執り行われている。

⑤ 不遣池

厳島神社境内地にある不遣池やらづいけは、新川の水源地となっており、昭和10年(1935)ごろ旧陸軍の軍事関連施設の拡張時に一部が埋め立てられ築堤された。市街地内の雨水排除を目的とした都市下水路が接続されており、浜松市都市下水路台帳によると、不遣池やらづいけは昭和42年(1967)には現在の形状で存在していた。

厳島神社(寸田ヶ谷)に掲げられた扁額によると、永享4年(1432)ごろ、池には二匹の大蛇が住みつき、人々は「不遣不逃やらづのがさず必ず殺害す」と言って恐れ、「不遣の蛇池」と呼ぶようになった。人々の往来が途絶し、普斉寺の高僧華藏義曇けぞうぎどん禅師¹は、弟子の命天和尚にその災いを絶つよう命じた。和尚に諭された大蛇は霊となって鉢の中に納まり、一蛇は普斉寺に鎮守として祀られ徳川家康の御持仏の弁財天と境内に合祀された。他の蛇は不遣の池の傍らに祠を建立し、弁財天として祀られた。地元では、この弁財天の祠の前で百万遍の数珠を回して雨乞いすれば、必ず雨が降るといふ「雨乞い」伝説が語られて、数珠は代々の氏子総代により大切に引き継がれている。



図2-2-21 不遣池



図2-2-22 雨乞いの数珠

⑥ 入野の路地と古民家群

佐鳴湖南岸に位置する入野地区を貫いて、浜松の中心街から西に向かって浜名湖まで一本の街道が続いている。この街道は「雄踏街道」と呼ばれ、その脇には明治43年(1910)まで主要であった旧道が昔ながらの風情を残し、肥沃な湿地帯と水運の利などの豊かな地理的要因がこの地区の繁栄をしのばせるまち並みを形成している。

入野地区は、かつては織物工場と田畑の連なる田園地帯で、第2次世界大戦の戦火を免れたことから、土蔵、古民家が往時の姿で数多く遺されている。また、旧道は道幅が狭く、緩やか



図2-2-23 横囲いの裏路地

¹ 華藏義曇は寺島(浜松市中央区)に随縁寺すいゑんじという草庵を設けたのち、元弘3年(1333)に随縁山普濟寺を開いた。また、華藏義曇の弟子たちにより普濟寺13派が教線を広げた。

に屈曲しており、^{まき}槇囲いの生け垣で区画されていることが特徴である。



図2-2-24 多数残る蔵のひとつ



図2-2-25 織物業を営んでいた住宅
2階は女工の宿泊室



図2-2-26 三連のこぎり屋根の織物工場



図2-2-27 土橋(佐鳴橋)付近のまち並み 令和2年(2020)撮影

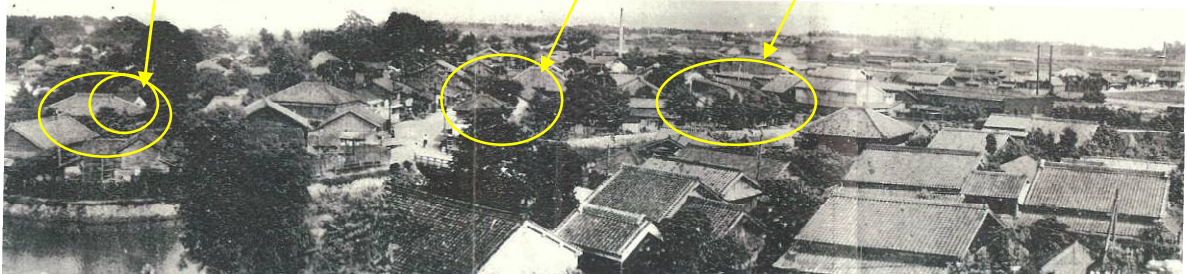


図2-2-28 土橋(佐鳴橋)付近のまち並み 入野村勢要覧(昭和26年(1951)発行)

延宝6年(1678)ころ製作された「青山領分絵図」には、佐鳴湖南岸にいけすや舟蔵の文字が記され、明治中期の地形図には湖岸から集落内に向かって幾本かの水路が描かれている。そのころの入野地区では各集落の有力者が漁業組合の役員となり、農家の人を雇って漁を行っていた。そのひとりで代々酒造を生業としていた豪農の竹村家では、漁のあと、敷地内のいけすに魚を放してから舟をつけたといわれ、また、当家の女の仕事は舟で富塚まで渡り養蚕用の桑の葉を収穫することであったとも言われている。竹村家の敷地の北側



図2-2-29 青山領分絵図(絵図に一部加筆)

には護岸の痕跡が確認されていることから、舟と生活が密接に結びついていたことがうかがえる。

ア.竹村家

登記簿によると、竹村家の主屋は明治35年(1902)に竣工。5寸勾配の切妻屋根の本体に4寸勾配の寄棟の下屋を4周に廻し、南側は土庇としていた。変形6間取りの内部構造で、西側妻部に残された漆喰塗り廻しの外壁が特徴である。

昭和32年(1957)の第12回国体漕艇大会の折には、愛媛大学の選手10人が宿泊をしている。竹村家はそれに先駆けて大規模な改修を行っており、漆喰塗り仕上げであった外壁の多くが亜鉛メッキ鋼板巻きで包まれた。内部の土間は玄関を残して床が張られ、台所や浴室等に改修し、2階は土間の吹き抜け部分を塞ぎ、南側を洋間や和室に改修している。



図2-2-30 竹村家

イ.入野八幡神社

入野八幡神社のまえどの前殿は桁行3間、梁間3間、うしろどの後殿は桁行2間、梁間1間の八幡造、銅板葺き。祭神はほんだ わけのみこと品陀和氣命を主神として、おおやまつみのみこと山神社大山祇命を合祀している。境内には明治29年(1896)10月の建立年が刻まれた鳥居や昭和29年(1954)11月建立の戦没者の忠魂碑や忠霊殿がある。また、浜松市天然記念物に指定されている大樹のクスがそびえる。社伝によると織田信長が天下を平定し、安土城を築いた天正4年(1576)のころ、戦勝を祝って九州の大名よりクスが献上された。そのクスを戦勝祈願した神社に奉納し植えつけられたものであると言われている。また江戸時代には、村の救済のため枝をはらって樟脳業者しょうのうに売ろうとしたところ、村内に悪病が流行したため切るのを中止したという伝承が残されている。境内各所とクスの幹には無病息災を願う入野注連縄が張られている。

そして、境内と旧雄踏街道のあいだには佐鳴湖護岸の石垣が現存し、明治時代中期の地形図と重ね合わせると、佐鳴湖に繋がる水路に面していたことが分かる。



図2-2-31 八幡神社

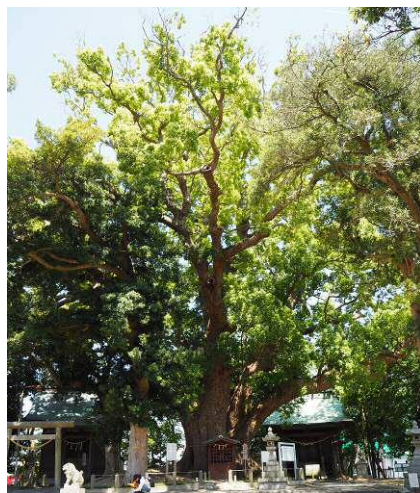


図2-2-32 入野八幡神社のクス
(市天然記念物)

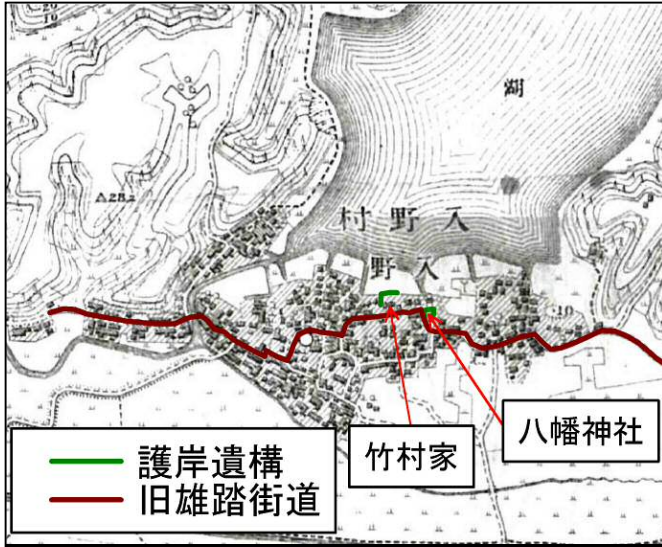


図2-2-33 明治中期の入野村
明治23年(1890)測図 明治32年(1899)発行
国土地理院所蔵(絵図に一部加筆)



図2-2-34 八幡神社の護岸遺構

ちよといっかく
コラム

入野古墳

入野古墳は佐鳴湖の南東に位置する直径44.0メートル、高さ5.9メートルの円墳である。蜷塚遺跡の発掘に来訪していた調査団が発見し、「蜷塚遺跡発掘調査報告書」に掲載されている。昭和34年(1959)に浜松市の史跡に指定された。平成4年から平成5年(1992～1993)に浜松市博物館が入野古墳の学習会を開催。昭和33年(1958)から活動している「浜松考古学友の会」の会員を含む市民らが、入野古墳の測量調査と一部試掘調査を実施し、葺石を持つことが確認されている。

墳丘には埴輪が見られないこと、大型の円墳であることから5世紀前半(約1600年前)に築造されたものと推定される。

円墳では市内で最大級であることに加え、海岸部を広く望むことができる三方原台地の南端に築かれていることをふまえると、この古墳には浜松南部地域の海上交通を含む、水運を掌握した人物が葬られていると考えられる。



図2-2-35 入野古墳(1980年代)

(4)佐鳴湖周辺を構成する人々の活動

①蜷塚公園から創出される縄文浪漫の調査研究活動

蜷塚遺跡の発掘調査が本格的に行われたのは、昭和30年(1955)からで、それ以前にも著名な研究者がこの遺跡を調査していたが、本調査は、浜松市により、昭和57年(1982)の第6次調査まで続いた。全国の学者を中心に班が構成され、市内の学生らは区域ごとに分担を持ち、本格的な調査に参加をした。市民の関心も高く、遺跡には絶えず見学者が訪れた。学者たちは随時説明会を開き、その日の発掘の成果を交えながら解説を行った。地元の蜷塚集落では、参加する学生に宿舎を提供するなど物心両面からの協力体制をとった。

蜷塚遺跡を含む蜷塚公園一帯は、昭和35年(1960)に蜷塚遺跡出土品収蔵庫で展示公開を開始し、昭和39年(1964)に陳列館と2棟合わせて市立郷土博物館蜷塚別館となった以降も、多くの市民が訪れ、縄文時代への浪漫を掻き立てる特別な場所となっている。

現在、市立郷土博物館蜷塚別館は浜松市博物館に機能を引き継がれ、蜷塚遺跡の出土品の展示はもとより、浜松の歴史を紹介する博物館として、また、発掘調査に関わった多くの市民の思い入れのある地として、長年にわたり愛着を持って利用されている。

開館当時から博物館等で学習を続け、市民有志で組織された「浜松考古学友の会」の一部が、平成5年(1993)に歴史研究・実践団体の「しじみの会」を発足させ、歴史技術の再現や復元した技術の体験公開を継続しており、カラムシ(苧麻)という雑草を利用して縄文衣服の再現に取り組んでいる。貝塚からは貝の腕輪や宝石の首飾りを身に着けた人骨が出土しており、縄文人が意匠をこらしたおしゃれを楽しんでいたと推測されている。浜松市内では衣服の出土例はないが、出土した土器の底部には繊維の模様が残っており、全国の遺跡で植物性の布が断片的に見つかっていることから、蜷塚遺跡周辺でも繊維を編んでいたものとみられている。そこで、「しじみの会」では蜷塚公園内でカラムシと染料のあかねを栽培し、カラムシの茎からはぎ取った繊維をたたいてほぐし、糸にして布に仕上げている。

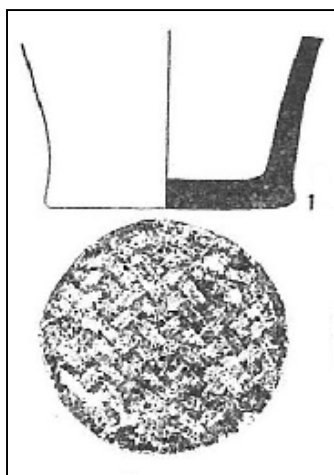


図2-2-36 土器底部の繊維模様



図2-2-37 「しじみの会」が作成した縄文衣服とカラムシの茎

このようにして、貝塚の発掘調査を起源として、貝層保存施設や博物館での展示や学習が行われ、縄文時代の人々の暮らしぶりへ強い関心を抱かせた。そして、蜆塚遺跡の貝塚は、ヤマトシジミを採取していた佐鳴湖との深い繋がりへ感興を誘った。そのような縄文時代への浪漫は、縄文時代から昭和40年(1965)ごろまで、当然のように食していた佐鳴湖のヤマトシジミを復活させようとする活動に伸展した。個々に調査や活動をしていた団体や学校をひとつにまとめようと、平成14年(2002)「NPO法人^{がっこう}縄文楽校」が発足した。市内で汽水域を持つ都田川からヤマトシジミを採取し、水槽内で佐鳴湖の水と砂だけでヤマトシジミを成育し、稚貝を誕生させ、佐鳴湖内での生息実験を行っている。

ほかにも、ヤマトシジミを自然繁殖に導き、復活させ、歴史的価値を現在に感じることを目的として、平成20年(2008)「佐鳴湖シジミプロジェクト協議会」が発足した。

佐鳴湖の東岸には「シジミハウス」と名付けられた1棟のビニールハウスがある。このなかには佐鳴湖から取り込んだ水を溜めるタンクと水槽が3つ並んでいる。水槽内では、佐鳴湖の水を循環させるだけで新たな稚貝が誕生していて、母貝になるまで大きく育つことが確認されている。協議会では養殖から1年ごとに区別して、ヤマトシジミの大きさを測定している。それらを蜆塚遺跡の貝塚のヤマトシジミの貝殻と比較すると、貝塚のヤマトシジミは充分に成育した個体であることが推測でき、縄文人の食生活や佐鳴湖周辺の環境が豊かであったことが窺える。

また、協議会では佐鳴湖の各地にヤマトシジミを入れて生息に適した環境を探るなど、調査や実験を繰り返し行っている。それらの結果、夏場の水温が比較的低温、蜆塚遺跡に近い佐鳴湖東岸のせせらぎ水路でヤマトシジミの自然繁殖が認められた。ところが、稚貝は成育途中で軟泥の堆積により窒息死しており、稚貝の濾過作用^{ろか}に負担がかかっていたと推定されている。このことから、湖内全域でヤマトシ



図2-2-38 シジミハウスの前で成育実験の結果について話し合うようす(提供シジミプロジェクト協議会)



図2-2-39 シジミハウスで育てたヤマトシジミ
左から1年目、3年目、7年目



図2-2-40 自然繁殖実験地の佐鳴湖東岸(せせらぎ水路)でヤマトシジミの入った籠を取り出しているようす

ジミが育つには水温や濁度を下げ、ラン藻¹の増殖を抑える環境が鍵となることが判明した。つまり、ヤマトシジミの成育は佐鳴湖の生態系の環境指標にもなっている。縄文浪漫であるヤマトシジミの復活が、ひいては湖の自浄作用を取戻すことになり、あるべき佐鳴湖の姿と重なるのである。

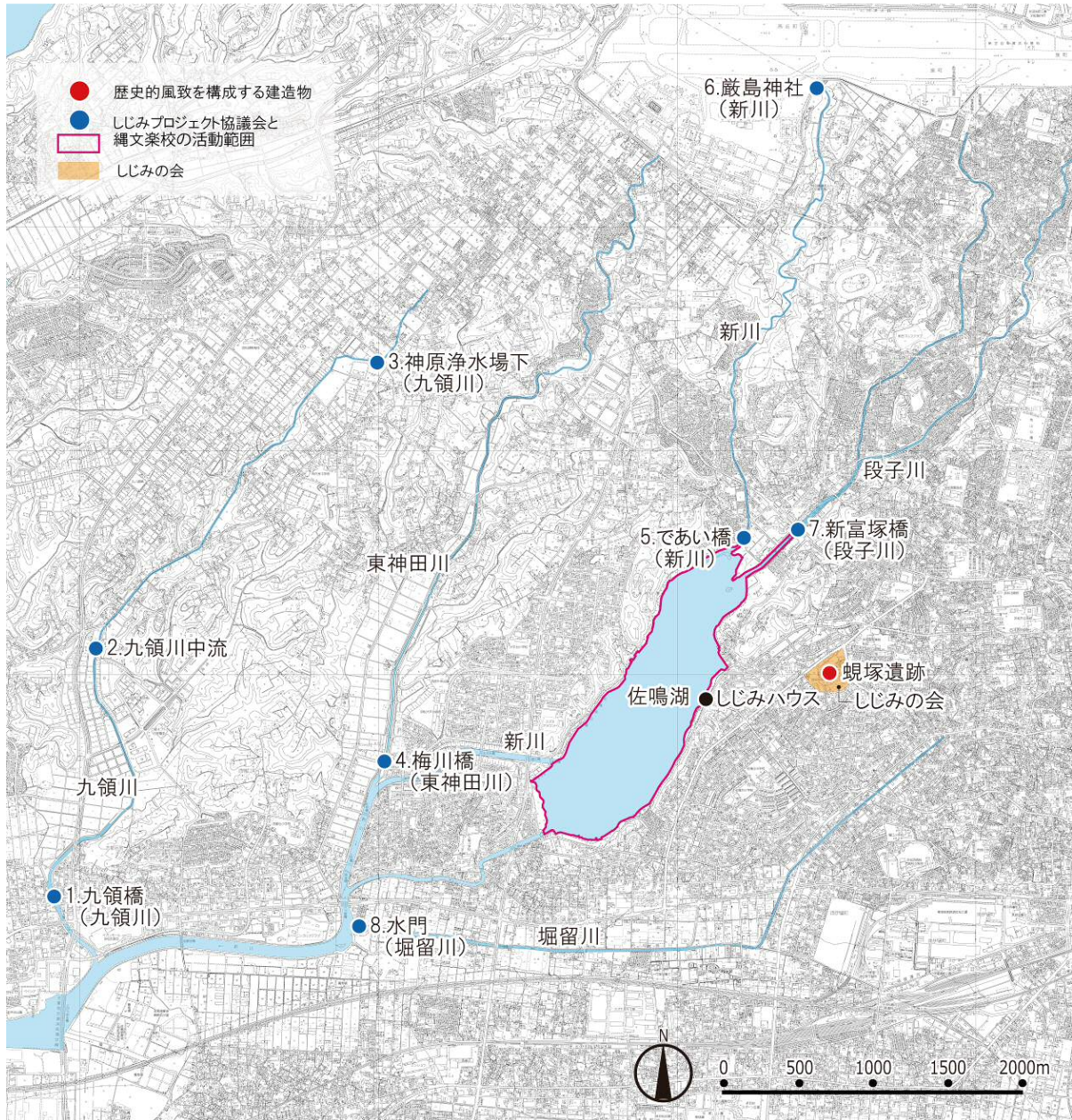


図2-2-41 蜷塚公園から創出される縄文浪漫の調査研究活動範囲図

¹ 植物プランクトンのうち毒性を持つ細菌類(バクテリア)の一種。夏の風のおだやかなよく晴れた日、池や湖沼の水面が緑色の粉を撒いたようになる。この現象は「アオコ」と呼ばれ、水中のラン藻が大量に増殖したもの。

② 蜷塚公園清掃活動

蜷塚公園にある蜷塚遺跡及び博物館は、毎年多くの社会科見学や遠足の幼児・児童が訪れ、休日には日本の昔の遊びなど様々な体験講座が催され、賑わいを見せている。公園内は桜の時期をはじめ、四季を通じて市街地周辺の自然を感じられる場となっている。縄文時代からあまり変わらない植生を維持しているといわれる敷地内の照葉樹林¹では、澄んだ空気と落ち葉や木の実を踏みしめる音を楽しむことができる。そして、復元住居の建つのでかな風景の広場では、足元を覗いてみると、あちらこちらから貝殻が顔を出し、原始時代から人々がここで生活をしてきたことを思い描くことができる。

蜷塚公園ではボランティアという言葉が一般的ではなかったころから、地域の住民や近隣の学生たちにより清掃活動が行われている。浜松海の星高等学校(現浜松聖星高等学校)の学校史『海の星二十五年』(昭和56年(1981)発行)において「昭和41年度(1966)に本校特有の奉仕活動として蜷塚遺跡の清掃が承認された。いずれもこの時初めてすることになったのではなく、すでに有志の生徒によって行われていたことが生徒会活動として確認されたというに過ぎない。」との記録が残っている。昭和42年(1967)にはこの奉仕活動を生徒会活動から独立させることが提案され可決された。昭和43年(1968)に生徒会から独立した奉

仕活動の団体は「末広会」と命名されて独立し、蜷塚遺跡をはじめ、佐鳴湖周辺の清掃や除草の奉仕を会員以外の生徒たちにも呼びかける積極的な姿勢をみせている。末広会の活動は長年の功績が認められ、昭和48年(1973)静岡県青少年育成会からの表彰状と顕彰の盾が授与



図2-2-42 末広会と蜷塚遺跡(昭和47年(1972))



図2-2-43 近隣の学生による蜷塚遺跡清掃活動(令和元年(2019))

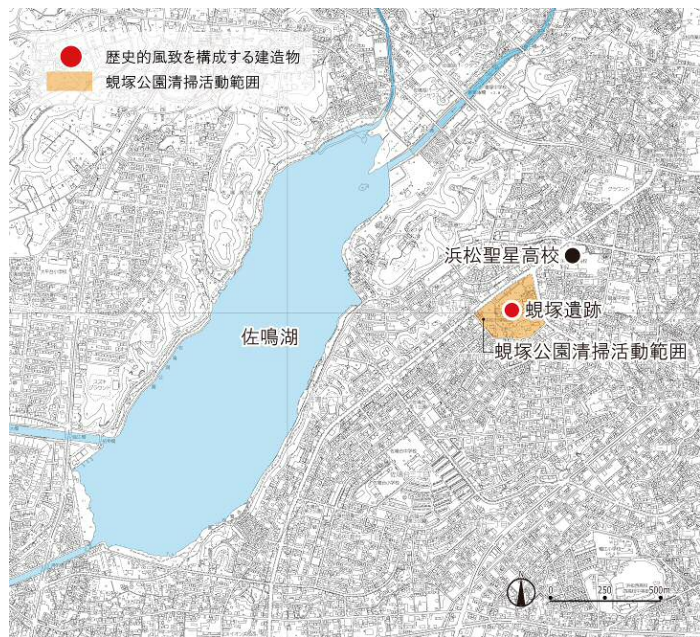


図2-2-44 蜷塚公園清掃活動範囲図

¹ シイ類・カシ類などからなる常緑広葉樹を主体とした森林で、東海地方の平野部を含む本州南半等で見られる。葉が小型で表面に角質が発達し、表面につやがあり日光に照るので照葉樹林と呼ばれる。

された。

現在でも、この活動は末広会会員を含む学生等に継承され、定期的に清掃活動に励む姿が見受けられる。

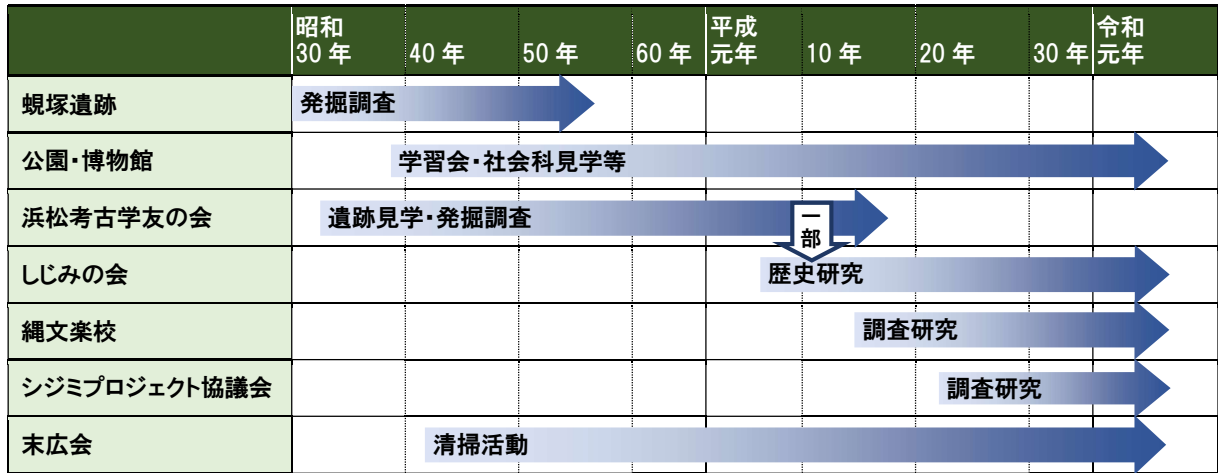


図2-2-45 蛸塚公園(蛸塚遺跡)における活動の推移

③佐鳴湖公園における漕艇競技

ア.国体と佐鳴会の活動

佐鳴湖での漕艇競技の歴史は古く、戦前から浜松高等工業学校(現静岡大学工学部)などが活動を行っていた。

昭和32年(1957)佐鳴湖において第12回国体漕艇大会が行われた。当時は国体縮小論が持ち上がり、漕艇競技は返上という声がかかるなか、入野村(現入野町)民や国体準備委員会、商工会が熱心に誘致運動を展開し、その熱意が実った大会である。長さ1,000メートルの3コースを設定し、艇庫や観覧席も新装した。竹村家など選手の宿舎に充てられた65軒では畳や布団を作り直し、井戸の掘りかえなどをした。保健所の国体料理講習会には会場が溢れかえるほどの受講者が集まり、熱心に料理の勉強に励んだ。全国の人に気持ちよく過ごしていただき、良い成績をあげてもらえるようにと、村全体が心尽くしのもてなしを行った。

地元の選手たちも村民以上に燃え上がり、昭和31年(1956)に青年有志で結成されたチームは「佐鳴会」と名付けられた。当時の佐鳴会はコーチもおらず、我流で練習を続け、筋肉の鍛錬と持久力の養成によって、見事ナックルフォア¹で男女とも静岡県代表に選ばれた。佐鳴会は第12回国体漕艇大会において、一般女子ナックルフォアで8位となり、結成間もない漕手たちの精一杯の善戦は高く評価された。

このようにして、佐鳴湖を舞台として行われ、村全体が燃え上がった国体は「やればできる」という勇気を与えてくれた。入野村民のその精神は、昭和32年(1957)3月に浜松市と合併後もそのまま市民に受け継がれた。それ以来、静岡県大会は佐鳴湖漕艇場で行われるよう

¹ ナックルフォアとは舵手付の4人漕ぎ規格艇のことであり、競技普及のために考案された日本独自の艇である。

になり、昭和 56 年(1981)には第 1 回全国中学選手権を開催した。佐鳴湖が「中学生漕艇の発祥の地」と言われる由縁である。現在は 6 月に東海・北陸・関東地区のチームが参加する「U-15 佐鳴湖ジュニアレガッタ」を開催し、7 月に行われる全国大会の前哨戦として評判を呼んでいる。



図2-2-46
第 12 回国体漕艇大会(昭和 32 年(1957))のポスター



図2-2-47
第 12 回国体漕艇大会(昭和 32 年(1957))
佐鳴湖の漕艇会場



図2-2-48
第 12 回国体漕艇大会(昭和 32 年(1957))佐鳴会青年女子ナックルフォア

イ.漕艇競技大会に向けた活動

佐鳴湖公園の漕艇場には市営の艇庫が 3 棟あり、シャッターを上げると艇やオールが美しく整列整頓され、ほんのりと潮の香りが漂う。週末や放課後になると若者たちが集まり日常の練習風景が始まる。艇庫から艇を出すときは、希少な艇やオールの扱いに細心の注意を払う。漕手たちは艇庫から自分らが漕ぐ艇を抱え、底を上にしたまま艇台へ置き、傷やネジのゆるみがないかを点検する。点検を終えると棧橋へと向かい、艇をひっくり返しながら湖面に浮かべる。艇に乗り込むと、目の高さには青々としたヨシと水平線が広がる。ボートは日焼けした逞しい腕と脚で力強く漕ぎ出され、波を立てず音もなく、湖面を滑るようにして遠くの霧^{もや}に消えていく。青年になると 1,000 メートルのコースを約 4 分で漕ぎ、湖畔を自転車で伴走しても追いつかない速さになる。



図2-2-49 漕艇競技大会(令和元年度(2019)浜松市民スポーツ祭 漕艇競技種目の様子)

佐鳴湖は海水が混じっているため、他の漕艇場の水質と比べると重い感触が伝わってくる。陸に上がると、部品がさび付かないように潮を丁寧に洗い流し、滴の一粒々々を拭き取り、艇の手入れにも余念がない。美しく整理整頓された艇庫は漕艇界の模範となっている。

漕艇は漕手の強い意志、体力、優れた技量によって自己の持つ力を最高に発揮させなければならない。陸に上がってからも公園内の遊歩道での走り込みや艇庫内に設置してあるトレーニングマシンを使用し、厳しい練習を重ねている。

佐鳴湖において大会が開催される前日になると、県下の中高校生や社会人などの漕手たちが入念に手入れされた艇を運び込む。長い艇はトレーラーで運ばれ、迎える側はその誘導や整理に追われる。コースの設営や物品の準備も同時に行う。大会当日は若者たちで賑わい、艇の多さで佐鳴湖が狭く感じるほどの活気となる。

大会が終わり、いつもの佐鳴湖に戻っても、ここに艇庫を持つ漕手たちは次の大会に向けてまた練習を始める。

このようにして、佐鳴湖公園では漕艇練習の音が力強く響き渡り、人々が一体となり、力を合わせてやってきた歴史を形成している。

ウ.漕艇普及啓発活動

佐鳴会は平成11年(1999)に「浜松ボートクラブ佐鳴会」に名称を変更し、国体出場や各種競技会出場を目指すスポーツ選手を頂点に、市民レガッタ大会出場を目標に大人から子供までボートを楽しむクラブチームへと形を変えて活動している。

漕艇競技は「紳士のスポーツ」「ヒーローなきスポーツ」として知られ、年齢に関係なく多くの仲間と楽しむことができるスポーツである。しかし、部活動で活躍してきた漕手たちは、進学や就職に伴い漕艇競技から離れてしまうことも少なくない。そこで、浜松ボートクラブ佐鳴会では毎月1回、小学4年生以上、年齢性別問わず参加を可能とするボート教室を開催している。初めてボートに乗る人は艇の種類や乗り方、漕ぎ方など基礎知識を学ぶ。また、ボート部のない学校に進学した学生の受け皿として、大会への出場を目指している。



図2-2-50 整理整頓が行き届いた第3艇庫の中から佐鳴湖を望む



図2-2-51 五月レガッタ大会

浜松ボートクラブ佐鳴会が主催する「五月レガッタ大会」は毎年5月に佐鳴湖で開催される。広報はままつ昭和54年(1979)6月5日号には第19回目となる五月レガッタ大会について掲載されており、このことから昭和35年(1960)から開催されている大会であることが分かる。この大会は国体開催後に入野村の小字同士の交流として始まり、のちに周辺地域の青年団も参加、約60年の歴史を持つ市民大会へと発展した。東日本大震災への配慮と安全面などの問題から平成23年(2011)から2年間の一時休止に追い込まれたが、歴史ある大会を継続させるため、平成25年(2013)に佐鳴会がこの大会を独自に引き受け復活させた。国体漕艇大会の記念碑の前では、揃いの色のユニフォーム姿で漕手たちが艇に乗り込む。

浜松ボートクラブ佐鳴会には80歳を超える高齢の会員が在籍し、多くの人たちが関わってきた長い歴史を感じる。湖畔に住居を構える会員は、自宅から毎日の練習風景を眺めている。みんなで力を合わせて心をひとつにする漕艇競技に誇りを持ち、それを青少年に伝えるべく艇の管理や指導を行っている。漕艇は安全面への配慮や艇の修理など苦労も多い。しかし、漕艇に向けた水面、徹底した安全管理、漕艇経験を持つ指導者、この3つの条件が揃う漕艇場はあまり存在しない。まだ漕艇を知らない子供たちには、佐鳴湖の漕艇を体験してもらい、この環境をずっと守っていくために日々の活動を行っている。

このようにして、浜松ボートクラブ佐鳴会が主催するボート教室や大会は、漕艇人口を増やし、佐鳴湖の自然に触れ、地域の自然環境を見つめ直す機会を持つことができる。さらには生涯スポーツとして、子供からお年寄りまで年齢に関係なく活動できる場を提供し、次世代への橋渡しを担っている。

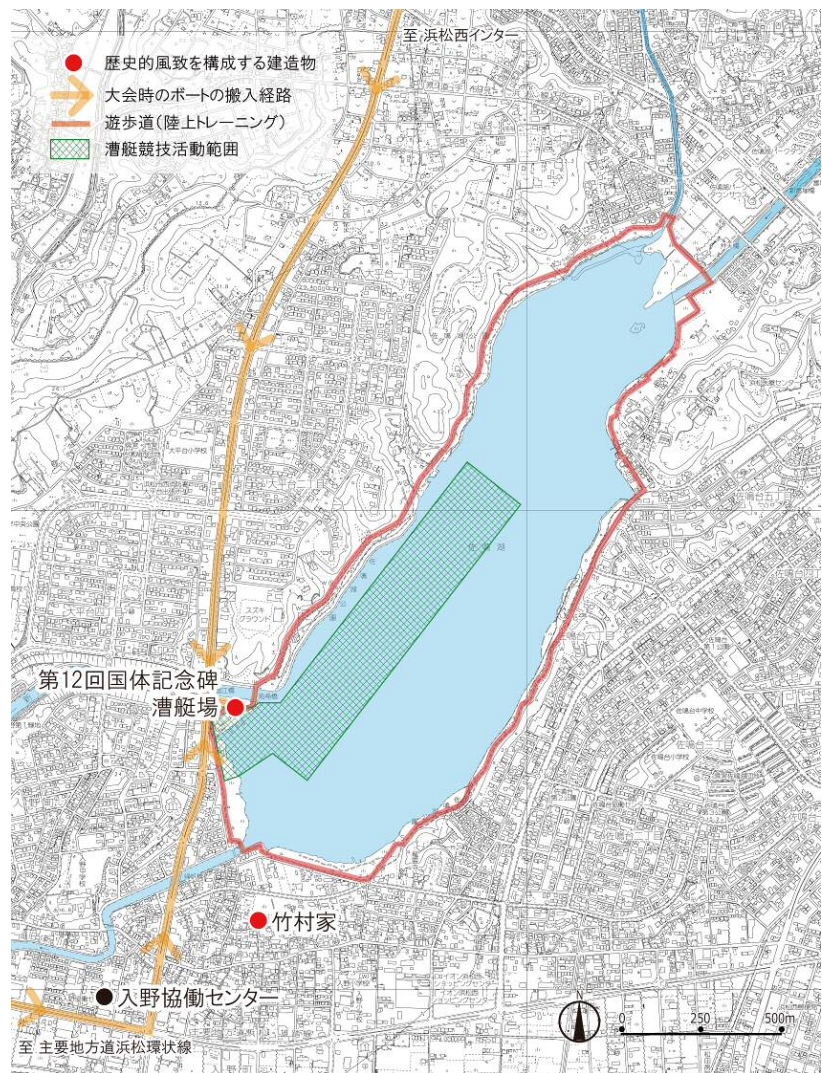


図2-252 佐鳴湖公園における漕艇競技範囲図

④入野地区の産業

ア.遠州織物

入野地区の産業は、江戸後期に茶業が盛んとなり「入野茶」として江戸に販売し、日本でも横綱級の荒茶生産を誇った。そして、茶を植える農家は他の農作物を植える農家と比較すると時間的にゆとりがあり、農家の兼業として綿織物業をするようになった。また、竹村広蔭の著書『変化抄』によると、文政 12 年(1815)ころから高機^{たかばた}を使用した織物業が当地に根付き、のちの盛況を極めた遠州織物へと展開している。入野のまち並みのなかで、北側の天窗からやわらかな光を採り入れ、のこぎり屋根の織物工場が並ぶ様子は、入野地区の隆盛を今に伝えている。



図2-2-53 のこぎり屋根の織物工場

イ.佐鳴湖の漁業

入野村勢要覧昭和 26 年版(1952 年 6 月出版)によると、佐鳴湖には観光による漁業権があったが、明治 34 年(1901)にその漁業権を入野区が漁師から買収し、明治 36 年(1903)に入野漁業組合を作った。竹村家など各部落の有力者は、敷地内に専用の水路を設けていたとみられ、護岸の石垣が宅地のはずれに残されていた。現在でも入野漁業協同組合において天然うなぎ漁が行われ、首都圏の料亭向けに高値で取引されている。近年は女性漁師も現れ、佐鳴湖がいかに豊かな湖であるかを伝えるために、漁師の視点から湖の中を伝えることを使命として出前講座を行っている。



図2-2-54 天然うなぎ漁をする入野漁協の漁師

ウ.注連縄飾り^{しめなわ}

a.概要

浜松駅周辺では年末になるとお飾り売りの露店が立ち並ぶ。いずれにしても、駅の周辺でお飾りを売っているのは入野の人だけである。そのいわれは、入野地区は昔、引間城主の飯尾乗連が入野にのみ注連縄^{のりつら}の製作と販売を許可し、その生活の安定を図っ



図2-2-55 年神様が座るハナ(福俵)

¹ 木製手織機的一种。機の構造が高い位置になっており、織り手が腰かけて作業するため、両手で操作ができるため能率が良い。

たと地元では伝えられている。「星の玉」と言われる玄関飾りが特徴的で、輪の中に年神様が座る福俵(ハナという)を2つ作り、福を招き入れる象徴としている。

明治40年(1907)ごろ、^{はかまた そうきち}袴田惣吉が東京都の消防出初式で車に飾られていた注連縄に感心し、改良を加えて広めたもの。入野村沿革誌によると、販路が広がり農家の副業として有望なため、昭和7年(1932)に入野注連縄組合が結成された。現在の組合加入者は8軒ほどで、正月のほか夏祭りや秋祭りなどには入野八幡神社や境内の忠魂碑及び市内外各所の神社仏閣に注連縄を納め、地域の特産品として伝統文化を継承している。



図2-2-56 しめ縄(星の玉)

b.注連縄づくり

正月用の注連縄づくりは5月の田植えを経て梅雨明けから開始する。青田刈りと呼ばれ、米を収穫せずに青くしなやかなうちに稲を刈る。青田刈りの由緒は一説に、永禄年間、注連縄づくりのための水田には年貢米の免除を受けていたことからとある。稲は鎌でなるべく長く刈り取り、リヤカーで旧新川まで運び、河川敷で天日干しをする。かつては佐鳴湖湖畔で干していたという。作業は早朝から行い、夕方になると取り込む。青い藁は清々しく、どこか懐かしい香りを漂わせ、心を落ち着かせる。翌日、枯れた部分や短い葉を掻き、根元を揃えて束ねる。穂先が日に焼けないようにゴザをかけて、根元部分に日を当てる。2～3日自然乾燥させたあと、さらに乾燥機にかけていく。



図2-2-57 青田刈りの様子



図2-2-58 旧新川河川敷での天日干し



図2-2-59 藁の選別と結束作業



図2-2-60 穂先にゴザをかけ根元のみを天日干しする様子

次の作業では、藁の袴¹を藁選り²で取り除き、根元に切り出しナイフをあてて残りの袴を引き抜く(ミゴ抜きという)。きれいになった藁を霧吹きで湿らせ、編みやすくなるためにローラーにかける。星の玉の作り方は、約200本の藁を6つに分け、3束は垂として縦に垂らし、他の3束は手足を巧みに使い左に^な編み進んでいき、垂れを編み込みながら輪型に整える。垂れの一部は三つ編みにして折り曲げ、輪の中央下に福俵としてしつらえ、最後にダイダイとユズリハ、ウラジロをつける。



図2-2-61 しめ縄を左に編んでいる様子

c.お飾り売り

かつては年末になると早朝からリヤカーにお飾りを乗せて雄踏街道を引き売りした。お得意さんの家や入野八幡神社や寺院などに注文の品を納め、午後になると浜松の駅前や繁華街で立ち売りをしてきた。子供たちも花松(門松の代わりに玄関や神仏、お墓に供えるため、松竹梅を束にしたもの)やゴ(松葉)を売り歩き、一家の大事な戦力となっていた。



図2-2-62 お飾り売りの様子

組合員は、現在でも一家でお飾り売りに出向き、伝統ある注連縄づくりが家業であることに誇りを持っている。幼少のころから販売に携わっている組合員が多く、御最^{ごひいき}賈の客が毎年買い付けに来るなど、年末の風物詩としてまちの中心地を彩っている。

¹ 藁の茎以外の部分。

² 藁の茎だけを選別するための農機具。

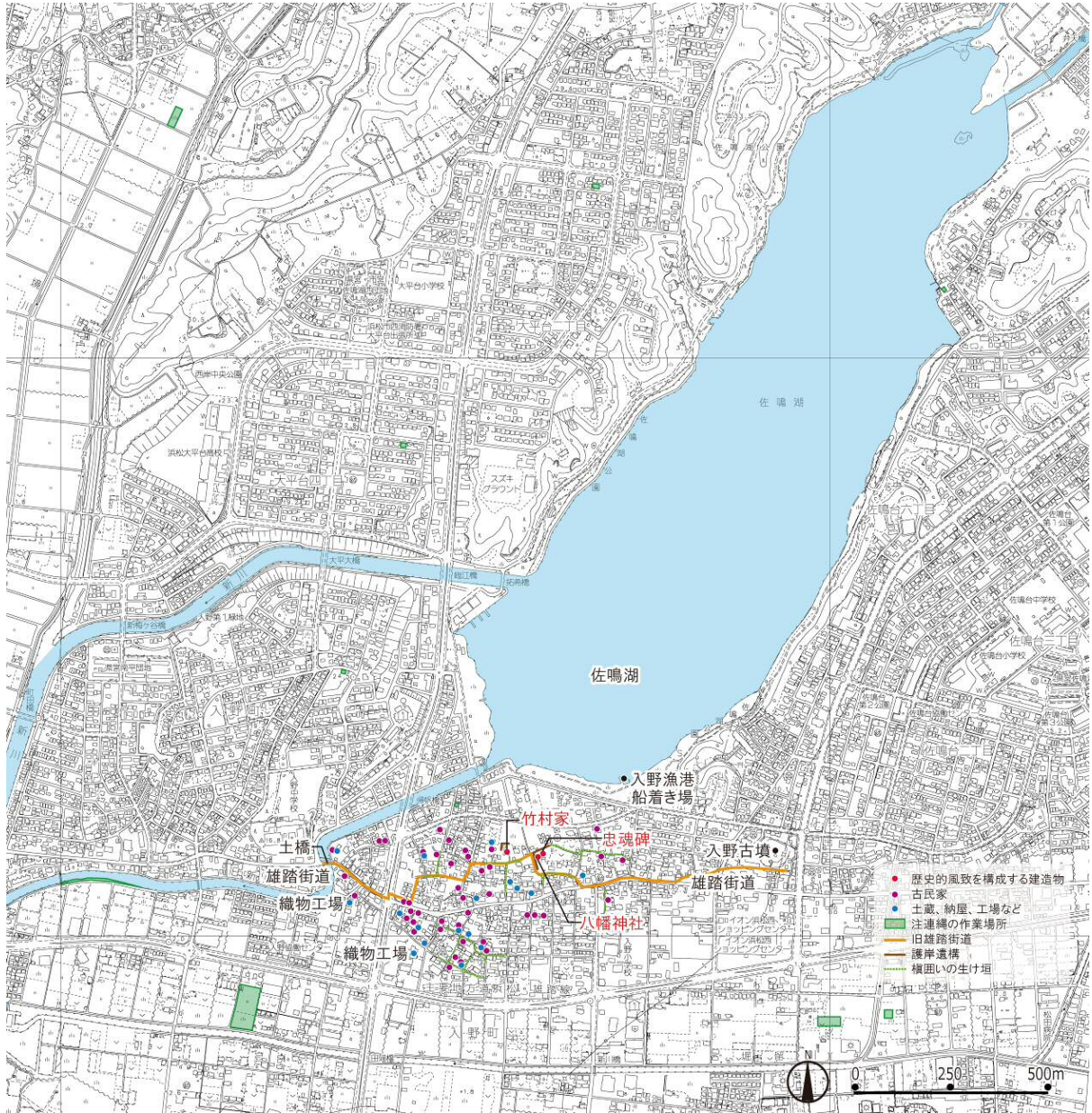


図2-2-63 入野のまち並みと産業の範囲

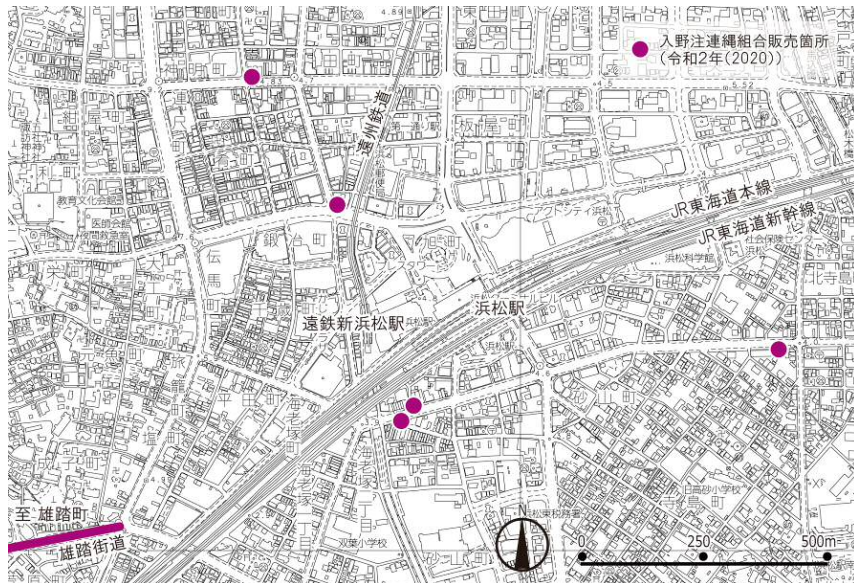


図2-2-64 浜松駅周辺 入野注連縄組合販売箇所(令和2年(2020))

⑤佐鳴湖花火大会と浄化活動

ア.佐鳴湖花火大会の成り立ち

明治29年(1896)『八王子天王社再建録の別紙』やそれ以降の『煙火寄附帳』によると、富塚村(現富塚町)の八王子神社では毎年7月中旬から8月初めにかけて祭りの夜に花火が打ち上げられ、「八王子様の花火」として親しまれていた。まちの古老によると、花火師が一人いるだけで、境内まで花火を運ぶのは青年団の役目であり、大変な作業であったという。

神社周辺の住宅化や青年団の解散等で昭和40年代に花火は一旦休止したものの、神社において餅投げや奉納された穀物を麴屋で発酵させ、翌年の炊き出しで神社下の湧き水を利用して甘酒として振舞うなど、夏祭りの行事は継続しながら、自治会などが花火再開のための準備を進めてきた。

一方、入野地区では昭和25年(1950)のガチャ万景気¹以降から昭和40年代(1965)にかけて、多いときには80軒の織屋があり、好景気に沸いて佐鳴湖で盛大に花火を打ち上げていたこともあったという。

そして、平成元年(1989)8月6日に八王子神社の花火大会の復活を願い、佐鳴湖公園において花火大会が再開されることとなる。その様子は当時の朝日新聞と中日新聞に掲載され、平成元年(1989)8月3日の朝日新聞では、『明治四十一年、花火の打ち上げに対する警察の許可証が残っている。「それだけ歴史のある花火大会が二十年以上ないままなのは寂しい。周りに家が立ち込んだので境内は無理としても、場所をかえて、何とか復活できないだろうか」そんな気持ちが、自治会や商店街の人たちにもあり、企画がまとまった』と、歴史のある花火大会を復活させたことが記事となっている。

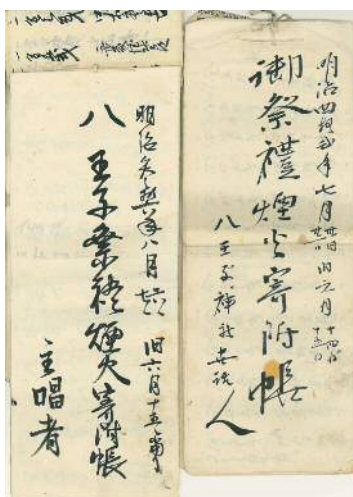


図2-2-65 八王子神社煙火寄附帳
左:明治36年(1903)
右:明治42年(1909)

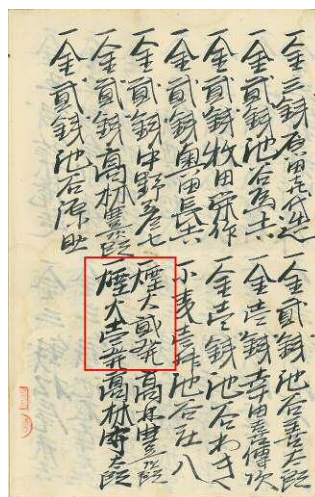


図2-2-66 八王子天王社の再建録(別紙)に記された花火の寄附(明治29年(1896))



図2-2-67 花火大会
写真 Koji Kishita 氏

¹ 繊維産業の空前の活況を表した言葉で、機械をガチャんと1回動かせば1万円儲かると云われるほどの好景気だった。「糸へん景気」ともいう。

花火大会はその後「佐鳴湖花火大会」と名称を変え、佐鳴湖周辺の自治会連合会(入野・富塚・佐鳴台¹)などで構成する実行委員会が主催し、毎年8月初旬に花火大会が行われている。

入野地区では佐鳴湖花火大会に合わせ、佐鳴湖南岸でふるさと夏まつりが開催される。そのため、佐鳴湖に向かって土蔵造りの家屋がある楨囲いの裏路地や入野八幡神社周辺の旧雄踏街道を浴衣姿の人々が通り抜ける。そして、佐鳴湖から花火が打ち上がるまでのあいだ、手筒花火や盆踊りを楽しんでいる。入野音頭には「^{おさ}箴の音」、「^{はた}機どころ」などの歌詞が盛り込まれ、織屋が栄えた時代を彷彿させる。のこぎり屋根の北側の天窓には佐鳴湖で打ち上げた花火が反射し、ノスタルジックな雰囲気を醸し出している。

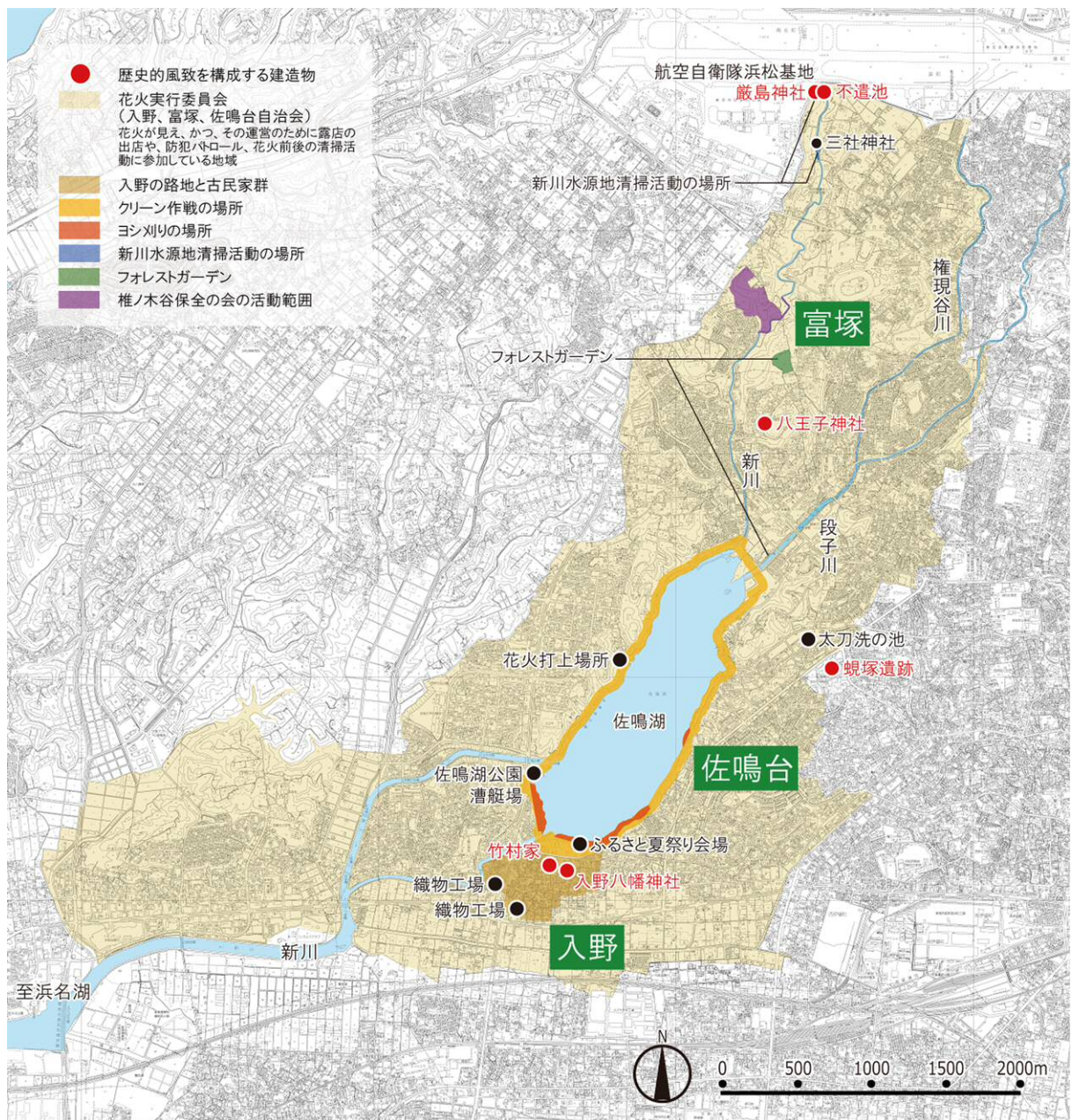


図2-2-68 花火活動範囲

¹ 元は入野町。昭和 51 年(1976)に新住居表示が実施された。

イ.水質浄化に向けた市民活動

周辺地域では花火の打上場所を佐鳴湖公園に変えたことで、佐鳴湖の水環境改善に目を向けるようになった。花火大会は「きれいな佐鳴湖を皆の手で」を合言葉に行われるようになり、佐鳴湖の自然愛護と環境保全への理解が次第に進むようになった。花火大会の後には実行委員や自治会、中学生のボランティアなど約3,000人によって佐鳴湖クリーン作戦（3月、8月に開催）が行われ、暑い最中に公園や佐鳴湖上流・下流河川の草刈りや清掃を行い、郷土を愛する心と奉仕の心を育てている。

新川水源地の不遣池や巖島神社（寸田ヶ谷）周辺では、毎月1日に敬老会によって境内や河川の清掃が行われている。このあたりはかつて、水の恩恵により水車産業が栄え、地元の人には大切にされてきた場所である。古老によると、昭和初期には毎週日曜日に子供たちが境内を清掃する習わしがあり、それがいつしか青年会から敬老会へと移り変わったという。

また、佐鳴湖公園を中心として環境教育が行われるようになり、自然観察や水質調査、植物観察等の実態調査や研究発表などの取り組みをしている。

市民の活動として特筆するのが、毎年11月ごろに行われる「ヨシ刈り」である。ヨシは佐鳴湖の南岸から東岸にかけて約1万平方メートルの水辺に植えてあり、湖上にはヨシで作った人工の浮島を浮かべている。ヨシは佐鳴湖の汚れの元となる窒素やリンを吸収して成長する特徴を持ち、ヨシを刈ることでヨシの成長を促進し、佐鳴湖の水質自浄作用を担っている。青々と茂ったヨシは美しい景観形成にも寄与し、浮島には野鳥が羽を休ませることもあり、市民の目を楽しませている。刈り取ったヨシは茶畑の敷き藁として再利用されている。



図2-2-69 花火大会翌日の佐鳴湖クリーン作戦の様子



図2-2-70 巖島神社と不遣池周辺の清掃



図2-2-71 青々と生い茂るヨシ



図2-2-72 ヨシ刈りの様子 写真 Koji Kishita 氏



図2-2-73
刈り取ったヨシをトラックに積み込む様子 写真 Koji Kishita 氏



図2-2-74
ヨシの再利用 茶畑の敷き藁

このようにして、佐鳴湖に対して地域住民のマナーと意識が向上しており、下水道の整備に加え、ボランティアによるごみ拾いやヨシの植栽等の市民活動が活発になってきたことにより、水質浄化も少しずつ効果が見られるようになった。漕艇をしても過去のような匂いや藻の絡みつきは一切感じず、水質指標であるCOD(化学的酸素要求量)はいまだ環境基準値を超えているが、佐鳴湖水環境向上行動計画(佐鳴湖地域協議会)で定める目標は近年継続的に達成しており、水質は改善されている。

近年、佐鳴湖上流の新川付近ではフォレストガーデンと呼ばれ、自然界の虫や鳥、植物の力を借りて、農薬や化学肥料、除草剤の必要性を無くし、竹林整備で出た竹などを炭にして畑の周囲の溝に埋め込み、土壌流出の防止や、地下水を汚さない取り組みをするなど、佐鳴湖への負荷を減らす新しい試みが始められている。また、佐鳴湖百景とタイトルして活動している写真家は、佐鳴湖の自然が織りなす美しい四季や上流の竹林に舞うヒメボタルなどを撮影し、写真を通じて数値では測れない美しさと価値を伝え、佐鳴湖のイメージ回復を目指している。



図2-2-75 上流の竹林に舞うヒメボタル
写真 Koji Kishita 氏

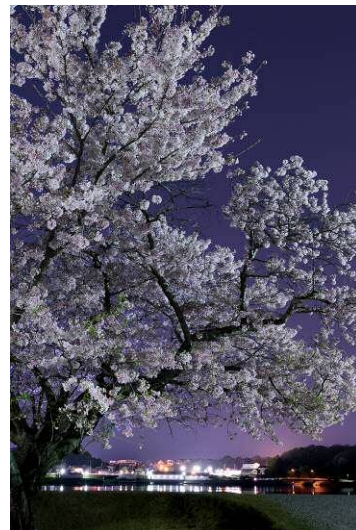


図2-2-76 夜桜と佐鳴湖
写真 Koji Kishita 氏

表2-2-1 その他の市民参加型の活動

No.	活動名	開催時間	活動内容
1	佐鳴湖地域協議会による 新指標水質調査 	不定期 (出前講座で実施)	市民の感覚で分かりやすい水質の基準を設けるため、湖に生息する生物や水のおい、ごみの量など、透明度に影響を与える因子の調査・分析を実施。
2	佐鳴湖地域協議会による 市民主体の取り組み の連携支援のための プラットフォームを設置	令和2年度から設置準備 を開始	取り組みを持続可能なものとするため、佐鳴湖に関わる様々な主体が互いに協力し、イベント等の啓発活動を活発に行う。
3	佐鳴湖里山楽校 	月2回 (第1、3日曜日)	様々な生き物を呼び戻すための里山の復元・保全活動。 会員約30人が在籍。棚田の管理や遊歩道の整備等を行う。
4	遠州自然研究会	通年	遠州地方を中心に静岡県自然を研究し、自然の保護活動を行う。佐鳴湖の周辺の環境調査研究に加え、啓蒙啓発活動を行う。昭和47年(1972)発足。
5	<small>しいのきや</small> 椎ノ木谷保全の会 	第2、第4日曜日	佐鳴湖の支流「新川」の流域にある「富塚椎ノ木谷特別緑地保全地区」(平成17年(2005)県下初の指定)において、現在残っている貴重な自然環境を、富塚町の宝としてのみならず、浜松市民の財産として守り、次世代に残していくために、市民が主体的に保全活動を行うことを目的として設立。自然環境の保全や里山の復元、調査研究活動、啓発活動を行う。本地区は佐鳴湖に流入する貴重な湧水を有する地区である。

(5)まとめ

佐鳴湖周辺は縄文人が居住し採集生活を開始して以来、その時代ごとに最も環境の良い場所が住处とされてきた。この潟湖は西の浜名湖まで水面でつながっており、舟運により浜松の歴史と深い関わりを持つ地域となった。住宅開発により今も多くの人が生活をしており、森と湖の両方の恵みを楽しむことができるこの地域は、市民が守っていききたい「市街地のオアシス」となった。

佐鳴湖の上流河川では、清らかな湧水を水源地として守るべく、清掃活動や環境教育に力

を注ぐ良好な市街地環境(保全活動と水環境)が継承されている。蜷塚公園と佐鳴湖公園は浜松市の憩いの場として、また地域固有の歴史や環境の体験学習の場として、佐鳴湖のめぐみが育ててきた価値を感じられる市民公園として整備された。佐鳴湖の下流河川では、屈曲し幅の狭い裏路地や護岸の石垣が、かつては舟を着けて生業と生活が共存していたまち並みを遺し、また数ある古民家や土蔵が織物産業で栄えた良好な市街地環境(伝統産業とまち並み)を形成している。現代は護岸が整備され船着き場は移動したが、生業の漁業は今なお引き継がれている。また、佐鳴湖は漕艇競技が行われる場へと広がり、入野の地域の人々は漕艇競技への支援を行うなど、佐鳴湖と舟と入野の市街地環境(舟との生活を彷彿させる景観)が一体となったまち並みを形成している。佐鳴湖はいつの時代も人と人をつなぐ存在であり、花火大会や佐鳴湖浄化活動を通してまた新たな歴史を踏み出そうとしている。

このように佐鳴湖周辺における水運の利に恵まれた地域の市街地環境と住民の活動は、地域固有の歴史的、伝統的な営みとして、継承されるべき歴史的風致となっている。

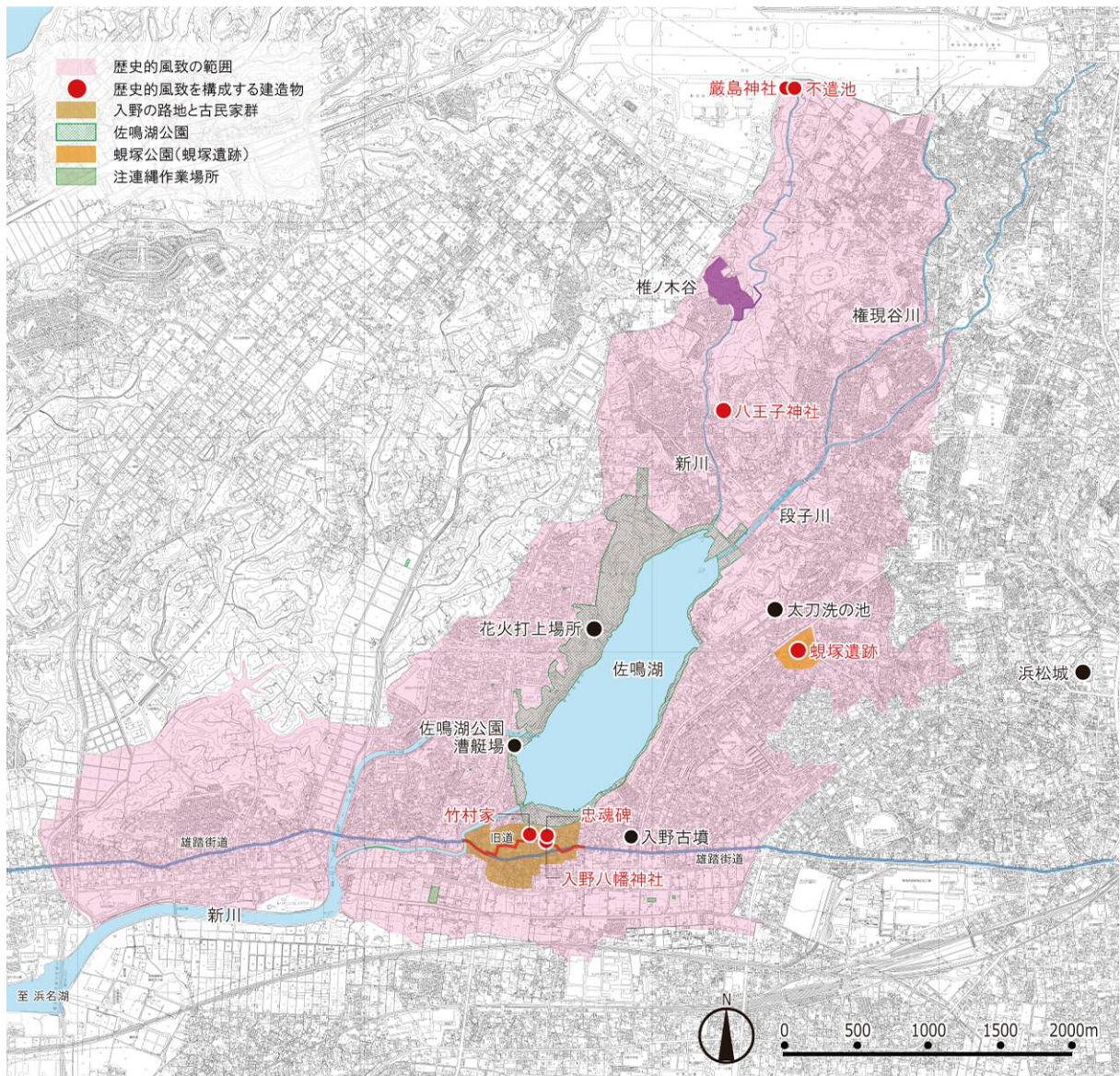


図2-2-77 佐鳴湖のめぐみに育まれる歴史的風致

ボートの聖地 ～天竜ボート場～

浜松市には佐鳴湖漕艇場と天竜ボート場の2つのボート場がある。日本ボート協会からC級以上の認定を受けたボート場が市内に2か所もあることは、全国的にも珍しく、浜松の魅力のひとつとなっている。

天竜川は、かつては筏や帆掛け船などの舟運のための“道”として利用されていた。（【参照】09 二俣地域の営みにみる歴史的風致）その本川に建設された船明ダム^{ほんせん}の湖面^{ふなざら}を利用し、平成元年(1989)「天竜ボート場」は誕生した。穏やかな水面で長い直線が確保され、2,000メートル、6レーンの公認B級コースを有し、ボート競技に最適な環境である。オリンピックをはじめ国際大会は2,000メートルのコースで行うことから、全国有数のボート場となっている。緑に抱かれた雄大な自然と条件の整ったボート場は、総務省・文部科学省による「スポーツ拠点づくり推進事業」により「ボートの聖地」にも選定されている。

平成2年(1990)3月には「ボートの甲子園」と呼ばれる「第1回全国高等学校選抜ボート大会」が創設され、天竜ボート場にて毎年開催されている。この大会は、次代を担う若手競技者の登竜門として多くの日本代表選手を輩出しており、今なお高校生の憧れの大会となっている。

平成3年(1991)開催の「第38回全国高等学校総合体育大会漕艇競技」では、市民の応援や民泊等で地域との交流が生まれ、全チームが感動の体験をもって大会を盛り上げた。平成15年(2003)「第58回国民体育大会ボート競技」では施設面の充実はもちろんのこと、指導者の確保と競技力の向上、審判員の養成を含めた質の高い実践がなされ、平成18年(2006)「ねんりんピック静岡2006ボート競技」への大きな成果、成功へとつながった。

天竜ボート場では、ボートを気軽に楽しむための艇庫や、ボートパークなどが併設されているほか、毎年、市民のためのボート大会「ボートフェスティバル in 天竜」を開催している。天竜区では、ボート競技を通じて市民の健康増進や地域活性化を図るため、「ボートのまち天竜」を広く区内外に発信している。



図2-2-78 天竜ボート場月艇庫



図2-2-79 天竜美林に抱かれ雄大な自然に囲まれたボート場

第 2 章

浜松市の維持及び向上すべき歴史的風致